

教員養成における教育実習関連講義の現状と課題

—岡山理科大学と岡山大学を事例とするシラバス分析を通して—

福田 博人^{1)*}・坂口 武典²⁾

1) 岡山理科大学教育推進機構教職支援センター

2) 岡山理科大学教育推進機構教職支援センター

要旨：

本稿では、教育実習に関連する大学講義のシラバス分析を通して、日本における教育実習関連講義の現状と課題を示すことを目的とした。より具体的な記述を行うために、本稿では岡山理科大学ならびに岡山大学に限定し、分析を行った。その結果、両大学とも文部科学省が示している教育実習の内容項目を概ね満たしてはいるものの、唯一学校経営に関しては扱われておらず、課題が同定された。その一方で、様々な独自の内容項目も取り扱っている現状も確認することができた。

1. はじめに

教育は未来への投資であり、その投資の成否を分ける要因の一つが教師の存在であることは言うまでもない。それ故に、教師の人材育成である教師教育は極めて重要である(cf. 福田・津田, 2019)。Wittmann(1995)は、数学教師教育が数学教育学における知見の最終形であることを示している。氏によれば、数学教育学は諸学問の隙間に存立しているとされ、このことから数学教育学以外の教科教育学も諸学問の隙間に位置づくと推察されるであろう。つまり、数学教育に限った主張から全ての教科教育に対する主張へと、教科教育の観点からは一般

化が、そして一般教育の観点からは拡張がなされ得る。

また教師教育は一般的に、大学在学中に行われる教員養成 (pre-service teacher education) と大学卒業後に行われる現職教育 (in-service teacher education) に分けることができる。本稿では、まだ教員として勤務する前の前者に焦点をあて、その中でも教員養成の集大成として実施される教育実習に着目することとする。多くの先行研究によって、教育実習の重要性は謳われ続けている(e.g., 米沢, 2008)。文部科学省(2017)によれば、学校体験活動を含む教育実習の全体目標として、次のように記述されている。

「教育実習は、観察・参加・実習という方法で教育実践に関わることを通して、教育者としての愛情と使命感を深め、将来教員になるうえでの能力や適性を考えるとともに課題を自覚する機会である。一定の実践的指導力を有する指導教員のもとで体験を積み、学校教育の実際を体験的・統一的に理解し、教育実践ならびに教育実践研究の基礎的な能力と態度を身に付ける。」(p.29)

Wittmann(2001)において、学問知 (scholarly knowledge) と実践知 (craft

knowledge) の往還の様子が示されている。両知識に基づけば、教育実習までに習得してきた学問知と実践知を、実際に統合的に活用するのが教育実習であると考えられ、教員養成レベルの教師教育において重要な位置を占める。

教育実習を関連とする大学講義について、日本の各大学がどのような内容で実施しているかについて確認するためには、各大学で作成・公開しているシラバスが参照できよう。J-Stage において「教育実習, シラバス, 教師教育, 大学, 学部, 制度」で検索すると、37 件の査読付きジャーナル論文がヒットした。その中で、題目からシラバス分析がなされていると推測できたのは、林(2012)のみであった。林(2012)は、シラバスを含む体育教員養成カリキュラムの分析がなされていた。しかし逆にいえば、シラバスの分析が行われている研究は日本においてほとんど蓄積がないといえる。そこで本稿では、教育実習に関連する大学講義のシラバス分析を通して、日本における教育実習関連講義の現状と課題を示すことを目的とする。なお、より具体的な記述を行うために、本稿では岡山理科大学ならびに岡山大学に限定し、分析を行うこととする。

2. 方法

前節で記したように、岡山理科大学と岡山大学を事例として、それぞれの教育実習関連の講義のシラバスを分析することによって、日本の教育実習関連講義の現状と課題を暫定的に同定する。教育実習を行う前段階として学校現場を観察する講義を有することが多い教育学部における教員養成と、そのような講義を有さないことが多い教育学部以外の学部における教員養成では、カリキュラムが異なる。教育学部以外の学部における教員養成では、学校現場の観察は教育実習自体に含まれることになっている

ため、講義内容に差異はないはずであるが、その実際は先行研究において検証されていない。それ故に、本稿では教育学部以外の学部での教員養成におけるシラバスに焦点化する。

シラバス情報は、各大学 HP (<https://mylog.pub.ous.ac.jp/uprx/up/pk/pky001/Pky00101.xhtml>) ならびに <https://kyomu.adm.okayama-u.ac.jp/Portal/Public/Syllabus/SearchMain.aspx>) から入手する。その際、「教育実習」で検索して得られる 2023 年度シラバスを分析の対象とする¹。実際には、シラバスに記載されていない内容も講義として扱われたり、また、その逆もまたあり得たりするが、客観性を担保するために、本稿においてはシラバスに記載されている文言のみを分析対象とする。

具体的な分析方法は次の通りである。シラバス内に記載されている講義目的、達成目標、授業内容²に着目し、文部科学省(2017)において示されている学校体験活動を含む教育実習の一般目標と到達目標と照らし合わせることによって、大学での教育実習関連講義の現状と課題を明らかにする。

3. 結果と考察

3-1 結果

シラバス検索によって、分析対象となる講義は、次の通りである。

岡山理科大学: 教育実習事前・事後指導, 教育実習実践指導, 教育実習 I, 教育実習 II

岡山大学: 教育実習 II (教育実習基礎研究), 教育実習 IV (中学校), 教育実習 V (高等学校)

そして、それぞれの講義のシラバス内に記載されている講義目的、達成目標、授業内

内容を整理したものは、表 1 に示される通り の一般目標と到達目標は、表 2 の通りである³。また、文部科学省(2017)において 示されている学校体験活動を含む教育実習

表 1：シラバス内に記載されている講義目的，達成目標，授業内容
【教育実習事前・事後指導関連】

	岡山理科大学	岡山大学
講義名	教育実習事前・事後指導	教育実習 II (教育実習基礎研究)
講義目的	事前指導は「教育実習の現場学習」に向けた心のリハーサル (プレ現場実習) の意味を込めて行い、事後指導は現場実習を終えた後に教育実習の総まとめを行うものであり、有意義な教育実習を目指し教職への意欲を高める。	教育実習に備えて、必要な知識・技能・心構えを身に付ける。
達成目標	1. 事前指導では現場実習に向けて教職の意欲を高めることができる。2. 事後指導では現場実習の反省を活かすことができる。	教育実習の意義・目的について理解している。教師としての基本的な心構えを身に付けている。指導案を作成し、授業を行うことができる。教育実習について具体的なイメージを持ち、真摯な姿勢で臨むことができる。実習後、自らの課題について振り返ることができる。
授業内容	生徒指導，教科指導法，特別活動，人権教育 (同和教育，LGBT 等)，SNS 等情報モラル教育，教育実習の体験発表会	教育実習の意義・目的・あり方，学習指導要領・評価のあり方を踏まえた学習指導案作成手順と方法，授業観察，学習指導案の分析と考察，授業設計・指導案構成，指導案作成・検討，模擬授業演習・討論，教育実習の反省

【教育実習関連】

	岡山理科大学	岡山大学
講義名	教育実習 I，教育実習 II	教育実習 IV (中学校)， 教育実習 V (高等学校)
講義目的	実践的な指導技術の理解，学校教育の実際についての認識の体得，教職に対する意識の向上と自らの適性の検証など，実際の教育現場において教育活動を観察する。(教育実習 I)	中学校で教育実践に取り組むことを通じて，教員の仕事や生徒の実態等について理解を深めるとともに，教員に必要とされる教科指導や生徒指導等に関する基礎的，実践的な指導力を身

講義目的	講義等で学んだ理論や技術の実際の場合への適用, 実践的な指導技術の訓練, 学校教育の実際についての認識の体得など, 実際の教育現場において教育活動を経験する。(教育実習 II)	に付ける。(教育実習 IV (中学校)) 高等学校で教育実践に取り組むことを通じて, 教員の仕事や生徒の実態等について理解を深めるとともに, 教員に必要とされる教科指導や生徒指導等に関する基礎的, 実践的な指導力を身に付ける。(教育実習 V (高等学校))
達成目標	1. 実践的な指導技術を理解し修得できる。2. 学校教育の実際についての認識を体得できる。3. 教職に対する意識の向上と自らの適性の検証ができる。(教育実習 I と教育実習 II)	生徒の実態に応じた学習指導案を作成し, その学習指導案に沿って生徒の反応を踏まえた授業を実施することができる。教師と生徒, 生徒同士のコミュニケーションを育む工夫ができる。教職員の指導やアドバイスに基づき, 関係者と協働して教育実践を行うことができる。(教育実習 IV (中学校)) 生徒の実態に応じた学習指導案を作成することができる。その学習指導案に沿って生徒の反応を踏まえた授業を実施することができる。教師と生徒, 生徒同士のコミュニケーションを育む工夫ができる。教職員の指導やアドバイスに基づき, 関係者と協働して教育実践を行うことができる。(教育実習 V (高等学校))
授業内容	観察実習, 教師の仕事, 校務分掌, 生徒指導, 教師と授業, 授業参観(理系教科, 文系教科, 実技教科), 特別活動(学級活動, 生徒会活動, 学校行事), 部活動(運動部, 文化部)(教育実習 I) 模範授業観察, 授業の参観・検討協議, 授業の担当・反省, 学級(ホームルーム)活動の授業参観・研究協議, 学級(ホームルーム)活動の授業の担当・反省, 学級経営への参加, 部活動への参加, 実習のまとめ・反省, 報告書の作成(教育実習 II)	授業観察・分析, 教壇実習と反省・分析, 特別活動の観察・参加・分析, 課題の明確化, 相談活動への参加, 教育実習全般の省察・評価(教育実習 IV (中学校)と教育実習 V (高等学校))

【その他】

	岡山理科大学	岡山大学
講義名	教育実習実践指導	—
講義目的	教師として必要な論理的思考力及び文章構成力, 集団におけるリーダーシップ・協調性及び調整能力, 学習理論の知識と学習指導の力量・教職に必要な知見 (教育観, 子供観, 教材観等), 「生きる力」の育成に求められるカウンセリング・マインド, 生徒指導観及び学級経営観からなる実践的指導力をなお一層高める。	—
達成目標	1. 不断の学習に基づき, 教師に必要な資質・能力がどのようなものであるかを説明することができる。2. 志望動機・理想の教師像・教職及び教科の魅力・教師の実践的指導力, 学校や教師に期待される役割 (普遍的役割と時代状況に則した役割), 現行の教育政策の概要とそれに対する自らの意見, 学校現場において想定される問題状況への基本的な対応方針について口頭及び筆記により明瞭に説明することができる。	—
授業内容	求められる教員像, 教師の専門性, 学校の意義と機能, 学校の意義と教師の使命, 生徒指導と学習指導, 生徒理解と生徒指導, 教育課程及び学習指導の理論と方法, 家庭・地域・学校間の連携協力, 現代の教育改革の動向, 学習集団の特質と指導, 学習集団の特質を踏めた学習指導・学級経営・生徒指導	—

表 2 : 教育実習の一般目標と到達目標 (文部科学省, 2017, p. 29)

事項	一般目標と到達目標
事前指導・事後指導に関する事項	一般目標 : 事前指導では教育実習生として学校の教育活動に参画する意識を高め, 事後指導では教育実習を経て得られた成果と課題等を省察するとともに, 教員免許取得までに習得すべき知識や技能等について理解する。これらを通し

事前指導・事後指導に関する事項	<p>て教育実習の意義を理解する。</p> <p>到達目標: 1) 教育実習生として遵守すべき義務等について理解するとともに, その責任を自覚したうえで意欲的に教育実習に参加することができる。2) 教育実習を通して得られた知識と経験をふりかえり, 教員免許取得までにさらに習得することが必要な知識や技能等を理解している。</p>
観察及び参加並びに教育実習校の理解に関する事項	<p>一般目標: 幼児, 児童および生徒や学習環境等に対して適切な観察を行うとともに, 学校実務に対する補助的な役割を担うことを通して, 教育実習校(園)の幼児, 児童又は生徒の実態と, これを踏まえた学校経営及び教育活動の特色を理解する。</p> <p>到達目標: 1) 幼児, 児童又は生徒との関わりを通して, その実態や課題を把握することができる。2) 指導教員等の実施する授業を視点を持って観察し, 事実即して記録することができる。3) 教育実習校(園)の学校経営方針及び特色ある教育活動並びにそれらを実施するための組織体制について理解している。4) 学級担任や教科担任等の補助的な役割を担うことができる。</p>
学習指導及び学級経営に関する事項	<p>一般目標: 大学で学んだ教科や教職に関する専門的な知識・理論・技術等を, 各教科や教科外活動の指導場面で実践するための基礎を修得する。</p> <p>到達目標: 1) 学習指導要領及び児童又は生徒の実態等を踏まえた適切な学習指導案を作成し, 授業を実践することができる。2) 学習指導に必要な基礎的技術(話法・授業・学習形態・授業展開・環境構成など)を実施に則して身に付けるとともに, 適切な場面で情報機器を活用することができる。3) 学級担任の役割と職務内容を实地に則して理解している。4) 教科指導以外の様々な活動の場面で適切に児童又は生徒に関わることができる。</p>

3-2 考察

表2における内容項目が, 表1の内容項目に含まれているか否かを確認するとともに, 表1における内容項目の中で表2の内容項目とは異なるものが存在するか否かについて確認する。表2における「事前指導・事後指導に関する事項」は, 岡山理科大学における「教育実習事前・事後指導」, 岡山大学における「教育実習II(教育実習基礎研

究)」に相当し, 表2における「観察及び参加並びに教育実習校の理解に関する事項」は岡山理科大学における「教育実習I」ならびに「教育実習II」, 岡山大学における「教育実習IV(中学校)」ならびに「教育実習V(高等学校)」に相当すると思われる。なお, 表2における「学習指導及び学級経営に関する事項」は, 岡山理科大学ならびに岡山大学の全ての講義に相当すると考えられる。

表 2 における内容項目が、表 1 の内容項目に含まれているか否かを確認する。ほとんどの表 2 における内容項目は、表 1 の岡山理科大学と岡山大学のシラバス内に存在していることが確認された。その一方で、表 2 における「観察及び参加並びに教育実習校の理解に関する事項」で記載されている学校経営方針に関する理解についてのみ、両大学ともシラバスからは見て取ることができなかった。

続いて、表 1 における内容項目の中で表 2 の内容項目とは異なるものが存在するか否かについて確認する。例えば、岡山理科大学における「教育実習事前・事後指導」で人権教育や情報モラル教育が、「教育実習実践指導」でカウンセリング・マインドや家庭・地域・学校間の連携協力が、「教育実習 I」で特別活動や部活動が扱われており、岡山大学においても「教育実習 IV」で特別活動や相談活動が扱われている。これらについては、表 1 では見て取ることができない内容項目であり、それぞれの大学の特徴であるといえる。

以上より、両大学とも概ね文部科学省(2007)で記載されている内容を満たしているものの、唯一学校経営に関しては扱われておらず、今後の課題といえよう。その一方で、様々な独自の内容項目も取り扱っていることも確認することができた。

4. おわりに

本稿では、岡山理科大学と岡山大学の 2 事例のシラバス分析を行って、日本の教育実習関連講義の暫定的な現状と課題を同定した。今後は、日本中の教員養成大学を網羅的に分析し、現状と課題の精緻化を図ることが求められる。更に、シラバス分析だけではなく、実際に講義されている内容を分析することによって、教育実習関連講義の実際から現状と課題を明らかにする点も今後

の課題として残されている。

註

- 1) 岡山大学における教育実習本体の 2023 年度シラバスについて、全ての項目が「後日記入」となっているため、2022 年度シラバスを用いることとする。
- 2) 講義目的、達成目標、授業内容について、岡山大学のシラバスでは、学習目標、到達目標、授業計画と同一視することとする。
- 3) 講義目的、達成目標、授業内容については、シラバスに記載されている通りに完全引用することもあれば、必要に応じて要約することもある。また、オリエンテーションなど、分析目的に必要な記載事項については、分析対象から外している。

参考文献

- 1) 福田博人・津田秀哲：数学教育における教員養成と教師教育の連関に関する一考察—岡山理科大学の事例から—、岡山理科大学教育実践研究、第 2 号、pp.1-8 (2019)
- 2) 文部科学省：教職課程コアカリキュラム (2017), https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf (2023 年 10 月 20 日最終確認)
- 3) 林楠：中国と日本の中学校体育教員養成カリキュラムに関する比較研究、スポーツ教育学研究、第 31 巻、第 1 号、pp.13-28 (2012)
- 4) Wittmann, E. Ch. : Mathematics Education as a 'Design Science', Educational Studies in Mathematics, Vol. 29, Issue 4, pp.355-374 (1995)
- 5) Wittmann, E. Ch. : Developing Mathematics Education in a Systemic Process, Educational Studies in Mathematics, Vol. 48, Issue 1, pp.1-20 (2001)
- 6) 米沢崇：我が国における教育実習研究の課題と展望、広島大学大学院教育学研究科紀要、第一部、第 57 号、pp.51-58 (2008)